慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 大学図書館における洋古書管理への不安 |
| Sub Title | A concern about the present state of rare book management at the university library |
| Author | 高宮, 利行(Takamiya, Toshiyuki) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 2007 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.92, (2007. 6) ,p.127(168)- 135(160) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 2006年度藝文学会シンポジウム : 古書-その過去・現在・未来 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00920001-0135 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 大学図書館における洋古書管理への不安

髙宮　利行

1975年から3年間イギリスに留学する機会を与えられた私は、帰国後三田と日吉に相次いで生まれることになる新図書館の建設委員会の末席を汚すこととなった。とりわけ三田の図書館の場合には、他学部の教授クラスの委員たちに囲まれて、文学部からはこれまたフランスから帰国してまもない仏文学専攻の鷲見洋一氏と私という若手だけだった。当時の三雲文学部長が「これからの図書館のあり方を考えるのには、留学から戻ったばかりの君たちがいい。好きなようにやりたまえ、後は自分が責任を持つ」と言ってくださったからだ。

既に、各専攻の共同研究室には研究室予算で購入した図書が溢れかえっていた。これを図書館に集めて、教員も学生も外部からの閲覧者の便に供したいという私たちの考えは、「大きくまとめて、きめの細かいサービス」をモットーに掲げた図書館側の意向と一致した（もっとも、その後配架スペースの狭隘化が予想外のスピードで進んだため、山中湖や白楽への分散化が起こってしまったが）。当時、図書への愛着が最も強く保守的と思われていた文学部が、真っ先に研究室図書を図書館に送り込む決定をしたので、他学部の教員に衝撃を与えたらしい。その後、英独仏の3専攻は足並みをそろえて、研究室図書予算の一部を図書館予算に合体させ、購入した図書を十進分類法によって配架する方針に切り替え、今日に至っている。他学部の研究室予算で購入、配架した図書がひとつの小分類で5桁の配架番号が与えられているおぞましい現実を見ると、早い段階での方向転換が功を奏したことに気づく。

1980年代から日本経済が飛躍的に発展するとともに、図書予算も毎年右肩上がりで延びていった。その結果、これまでなら夢だった稀覯書の収書も可能になった。これは全国的な傾向だったので、国内で洋古書を扱って

きた丸善、紀伊国屋書店、雄松堂書店といった輸入古書業者がにわかに活気づき、それに応じる形で欧米の古書店が日本市場を狙い撃ちにしてきた。経済復興に取り組んだ戦後の長い間、洋古書を入手するための外貨の調達も難しかったが、状況が激変したのである。欧米諸国からの圧力を受けて、外貨減らしのために「グーテンベルク聖書」の購入を文部省が企てた時期まであった。これは嘘ではない、本当の話である。なお雄松堂書店の歴史は新田満夫会長が回顧したエッセイ（Sheila Markham, *A Book of Booksellers: Conversations with the Antiquarian Book Trade*, London: Sheila Markham, privately printed, 2004所収）にある。

莫大な図書予算をきちんと消化せねばならない大学図書館にとって、スミスの『国富論』初版、マルクスの『資本論』初版、ダーウィンの『種の起源』初版などの一点豪華主義の稀覯書や特定分野の古書コレクションは、歓迎されたらしい。とりわけコレクションの場合には、欧米の古書業者から日本の古書業者に情報がもたらされ、後者が大学におけるその分野の専門家に情報を委ね、大学教授が所属する大学図書館に購入を推薦するやり方が、通常のルートだった。販路拡大の可能性を偵察する目的もあって、海外の古書業者はわが国にやってきて、大学図書館関係者と会談した。

2006年秋、イギリスの古書籍商協会（The Antiquarian Booksellers' Association）は設立100年目を迎えたのを記念して、エッセイ集 *Out of Print & Into Profit: a History of the Rare and Secondhand Book Trade in Britain in the Twentieth Century*, ed. by Giles Mandelbrote (London: British Library, 2006) を出版した。古書業者、図書館員、書誌学者らが寄稿した400ページを超えるこの大著には、わずか1ページだが、この時期の日本市場との関係を扱った記述がある。本書の標題がすべてを語っているように、Hamish Riley-Smithはここで「幸運に恵まれた私たちは古書販売で、短期間だったが途方もない繁栄の時期を享受したと思う。こんなことが私たちの生涯に再び戻ってくることはまず絶対にないだろう」と述懐している（同書169ページ）。いかに大きな利潤を上げたかである。その理由は1970年代後半に始まり、80年代、90年代前半と続いた日本の古書市場へのコレクション販

売だった。Chris Kohlerは、1977年に雄松堂書店に18世紀フランス演劇集を、丸善に19世紀イギリスの伝記コレクションを販売したのが嚆矢だったと記録している。例えば、ウィリアム・モリスがケルムスコット・プレスで印刷した限定版は、見た目にも美しいためかわが国で特に歓迎された結果、全53点を含むコレクションが10セット近く将来した。これを研究対象にするのは文学部であろうが、この学部を持たない大学図書館にも架蔵された。

しかし1990年代の半ばに日本経済のバブルがはじけると、この市場のほとんどが消滅し、「兵どもが夢のあと」になった。海外の古書業者による大学図書館詣でも終わった。

経緯はともかく、日本の社会がバブルで浮かれていたこの20年間に、すぐれた洋古書が日本の市場に将来したのは慶賀すべき現象だった。外国語の壁もあってか、わが国での洋古書の顧客は個人よりは図書館、それも大学図書館が圧倒的に多い。たまたま、多くの大学が踵を接して創立100周年を迎え、その記念事業の一環として新図書館の建設ラッシュが見られた時期とも重なった。それゆえ、増加する稀覯書を収蔵するために、どこでも貴重書書庫の拡充が図られた。

しかし、稀覯書の収蔵は単に書架スペースを増やせば済む問題ではなかった。稀覯書を含む特殊蔵書（special collections）を扱える学識のある図書館員の存在が必須なのである。わが国で和漢書はともかく、洋古書についての専門家を育てるのは容易ではない。一橋大学のように、フランクリン文庫などを収蔵する際に社会科学研究センターを立ち上げて、蔵書を主体に研究した結果を紀要や目録を通して公刊してきた機関は、決して多くない。図書館員の仕事は収書した図書を分類し、配架し、出納業務をして終わりになるはずがない、という事実はあまり知られていない。極論すれば、同一の版でも古書は一冊ずつその書物史的な性格を異にするから、従来の分類法だけでは不十分であり、所有銘、書き込み、製本などの特徴を特記事項として目録化して初めて情報となるはずだが、現時点ではほとんどの古書、とりわけ西欧の稀覯書についてはこの扱いがなされていない。

逆に言えば、文学部で外国文学や図書館学を専攻する大学院生にとっては、格好の修士論文の主題があるということだ。

1985年の『アーサー王の死』印刷500年を記念する展覧会を、慶應義塾図書館と丸善が共催して以来、慶應が誇る和漢書や洋書の稀覯書展覧会が定期的に開催されてきた。展示品の選定から目録作り、実際の展示と期間中の講演会の人選などに至るまで、主たる担い手は大学の教員であった。外国の図書館であれば、これらは特殊蔵書担当の専門図書館員の重要な仕事である。

慶應の貴重書室にも図書館員が配置されているが、彼らは専門図書館員ではない。閲覧者への貴重書の出納が主な業務であろう。この事実を私がはっきり認識したのは、慶應が1996年に「グーテンベルク聖書」を収蔵してしばらく経過した後、この世界的な至宝を管理するための委員会が構成された時だった。仮にこの聖書を展覧会などに貸し出す際に、貴重書担当者は全責任を持ってキュレーションに当たる資格と経験がないことが分かったからである。その理由からか、ほかにも安全性などの理由があるのか分からないが、欧米の図書館では然るべく一般人でも見える場所に常設展示されている「グーテンベルク聖書」は、慶應の図書館で展示されることはほとんどなく、キャンパス外の安全な場所に保管されて眠っているのである。

西洋印刷本の世界でインキュナビュラといえば、1500年以前に印刷された書物で、その量と質は図書館の格にまで影響する。2006年9月に来塾したバイエルン州立図書館のベッティーナ・ワーグナー博士は、我が図書館には世界最大のインキュナビュラ・コレクションがあると胸を張った。もっとも大英図書館は、重複本を除けば我々が最大のコレクションだと反駁するだろう。最近の徳永聡子氏の調査によれば、慶應には「グーテンベルク聖書」を先頭に52点が収蔵されている（Satoko Tokunaga, 'The First Report of the Keio Incunabula Project: A Checklist of Incunabula in the Keio University Library', *The Round Table*, 18 (2004), pp. 7-21）。ただし、科学研究費によって購入したものを含む最新の統計では56点となっており、この数字

は天理大学図書館や明星大学図書館に匹敵するものである（http://project.lib. keio.ac.jp/dg_kul/参照）。「グーテンベルク聖書」をも所蔵する慶應は、わが国有数のインキュナビュラ蔵書を誇る図書館といえるが、1964年以前に収蔵されたと思われる1点を除くと、すべて1979年以降の収蔵本である。前述したような入手可能な機会を捉えて収書した結果だといえよう。中には、現存部数が少ないもの、15世紀の製本のままの状態のもの、合綴本（Sammelband）として付加価値が高いもの（例えばStefanie Nartschik, 'Neo-Latin Verse and Its Composition: Introducing the Sammelband of the Keio University', *The Round Table*', 19 (2005), pp. 9-22）などが含まれており、いずれも特記事項を必要とする書物である。

前述したコレクションとしての収蔵に戻ろう。1980年代の後半に、慶應義塾図書館はフィリップ・ギャスケル旧蔵書を架蔵した。これは20世紀を代表する著名な書誌学者でケンブリッジ大学トリニティ・コレッジの図書館長兼フェローだった、ギャスケル博士の研究用蔵書であった。博士の蔵書は単なる好事家や収集家による貴重書のコレクションではなく、あくまでも研究資料として用い、その結果を著作として公表するために、長年にわたって構築されたものである。建築家サー・クリストファー・レン（1675-1711）の設計による有名な図書館の横にある博士の研究室は、2部屋と寝室、バス、トイレ付きという居住性のよい研究環境にあり、約2000点の書物が書棚を埋め尽くしていた。

本蔵書はギャスケル博士の多様な関心を反映して、手引き印刷機の時代と印刷が機械化された近代をカバーする印刷術とタイポグラフィー、本文書誌学、テクストの伝播に関する2000点を超える書物からなる。とりわけ古書は、印刷や製本のさまざまな技術、様式、本文の好例となっている。ギャスケル博士が蔵書に含まれるすべての書物や研究資料をロンドンのバーナード・クォリッチ古書店に売却するにあたっては、現取締役のジョーン・ウィンターコン博士（『ザ・ブック・コレクター』編集委員）が、全体を10部門に分類し、書誌学の部門はさらに5つに細分類した。

こうして慶應に将来したギャスケル旧蔵書だが、受け入れに当たって無

残な扱いを受けることになった。蔵書には書誌学関係の雑誌が揃いではなく、ギャスケル博士の研究上の必要に応じて単発で入っていたが、これらは既に図書館にすべて揃っているから重複本だという理由で捨てられた。また、書物の中に挿入されているメモや手紙の類も捨てられたり、一箇所に集められたりした。かくして「仕事中のギャスケル博士」を表すはずだった資料は「整理されて」しまったのだ。

製本のデザインなどが重要で収蔵されている書物に対しても、図書館の書架番号ラベルやID番号シールなどが貼られ、その上にニスまで塗られ、それらのデザインが台なしにされた例もある。2007年1月19日－2月9日に慶應義塾図書館で開催された展示会「イギリスの版元製本―ギャスケル蔵書を中心として」でも、この種の書物が展示された。また、博士が所有していた18世紀のタイポグラフィーの大家ジョン・バスカヴィルによる『祈禱書』の標題紙には、グロテスクとしか見えない蔵書印が押されてしまった。図書館員は、標題紙への蔵書印が美しく化粧した顔に泥を塗るような行為だとは、認識しなかったらしい。「和漢書の場合には、代々の蔵書印が押されている方が価値がありますから」と済まし顔で説明してくれた図書館員がいたが、洋古書に同じことがいえるとは到底思えない。

ギャスケル旧蔵書は図書館地下4階の準貴重書を収めた周密書庫内に置かれている。大型本は書棚からはみ出し、書架を移動させるたびにきしみ音と悲鳴が聞こえるようだ。この周密書庫には他にもかなり珍しい書物が押し込められているが、状況は同じである。この一画を海外からの図書館見学者に自信を持って見せられるのだろうか。あるとき旧蔵者のギャスケル博士から「自分の蔵書がどこにあるか、日本に帰る知人に見てもらって写真をとって欲しい」といわれて、その場を繕うのに苦心したこともあった。

どういう理由か知らないが、このすぐれた蔵書はすべて目録化されてOPACに上がっているわけではない。ギャスケル博士が引退する直前まで収集し研究していたジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』などは、蔵書に各版が揃っているが、目録化されているのは貴重書室にあるアンカット

の初版のみである。

この蔵書を図書館に推薦した私は、あるときから不安と責任感を抱くようになった。自分の定年前に何とか蔵書について知らせておかなければ、学生も図書館員も何も知らずに時を過ごすのではないか。そこで、数年前から大学院の書物史の授業では、この蔵書の内容を主題別に分析し、年度の終わりに図書館の小展示コーナーで展示会を開催することにした。授業と図書館を立体的に結びつける試みは、文学部の博士課程が慶應義塾大学21世紀COEプログラム（人文科学）「心の解明に向けての統合的方法論構築」の研究拠点に選ばれ、私が表象Aグループ「歴史的資料における心性の表象に関する総合的研究」に加わったこともあって、「フィリップ・ギャスケル博士の心性と蔵書」と題する展示会に結実した。4年続いた展示会の目録は、図書館のウェブでもまた高宮研究会が発行する年刊雑誌*The Round Table*でも見ることができる。こうしてようやく、図書館員の間に慶應には世界に誇ることのできる蔵書があるという認識が広まってきた。また英米文学専攻では、ギャスケル蔵書を分析し、その構築と研究が一体となって進んできたことを解明する修士論文が生まれた。

次に私は、英米文学専攻の教員諸氏の同意のもとに、「書物史から見た英米文学」という講義科目を設けて、教員によるオムニバス授業を始めた。ここ3年ほどは「書物の敵・書物愛」を取り上げた。長年縦横に利用して図書館を熟知した松原秀一名誉教授は「図書館員は書物の敵」という講演をしてくださり、その内容は後に『三田評論』に掲載された。それぞれの書物の本質に注目せず、ルールに則って残酷な扱い（少なくとも松原名誉教授にはそう見える）をする図書館員を批判した内容であった。

慶應だけではなくわが国では一般的に、図書館員は事務職であって研究職としての地位を与えられていない。これが特殊蔵書を研究する専門図書館員を配置できない理由であろう。だからといって、せっかく受け入れた蔵書、とりわけ貴重書を乱雑に扱ってよいはずはなかろう。授業の中で、図書館の幹部クラスの人物が平然と「本の好きな人には図書館員の仕事は向きません」と言い切ったとき、背筋が凍りつく思いをしたのは私だけで

はあるまい。

慶應の場合、図書館に人件費と図書購入費を与えただけで続いてきた図書館行政も、次第に海外ですぐれた稀覯書をもつ機関としての評価が高まってきただけに、このままで事足れりと済ませておけない状況となってきた。数年前、アジアで唯一の図書館としてRLG（Research Libraries Group）に参加した慶應に対して、最近Consortium for European Research Librariesへの参加も打診されたという。良書を所蔵することには、国際的に情報を交換し、共有する義務が生まれることを銘記せねばならない。

私はここで個々の図書館員の非を責めているのではない。和漢書はいざ知らず、こと洋古書に関して大学図書館にあるべきシステムが欠如している事実を問題視しているのである。問題は慶應だけではない。色々な面でわが国の大学制度の頂点に立つ東京大学の総合図書館も、同様の問題を抱えている。一例のみを挙げよう。1960年代前半、慶應の故厨川文夫教授が校訂したウォルター・ヒルトンの『完全に関する8章』を、オクスフォードの古書体学者N. R. ケア博士に送ったところ、ほどなくして博士から東大の総合図書館にある西欧中世写本の調査依頼が来た。厨川教授が照会したところ、件の写本（A1000.1300）は1ヵ月後に書庫から「発見された」という。その後1995年7月に来日したA. I. ドイル博士も、ケア博士と共通の研究者仲間のアンドルー・G・ウォトスン博士の依頼で、その写本の再調査をすることになった。あらかじめ閲覧予約を取った私がドイル博士に同行して総合図書館を訪れると、写本とともに文部省科学研究費による報告書（1987）を見せられた。図書館側の説明によると、ケア博士が*Medieval Libraries in Great Britain*, revised ed. (1964) に写本の所蔵先を掲載するや、外国の研究者から問い合わせが相次いだため、事の重要性に気づいた東大のイタリア文学科が本格的な調査に乗り出した結果だという。「灯台（東大）もと暗し」もいいところで、外国からの圧力がこの調査に結びついたわけだ。ちなみにイタリア、クライスト・チャーチ（カンタベリー）、オクスフォード（オール・ソウルズ・コレッジ）、東京大学を結ぶこの15世紀写本の重要性は、Andrew G. Watson, *A Descriptive Catalogue of the*

*Medieval Manuscripts of All Souls College Oxford* (Oxford: Oxford University Press, 1997), pp. 271-272 に略述されている。一読すればこれは日本の大学図書館の片隅で眠っているにはあまりに重要な写本だった、ということが分かる。しかし他の洋古書はどうだろうか。

過去 30 年以上にわたって、優れた洋古書がわが国の大学図書館に集積されてきたのは厳然たる事実である。残念ながらこれを受け入れる体制も知識も、そして心構えも十分ではなかった。というよりその意識がほとんどなかったということに尽きるだろう。目録も十分作られないまま貴重書室の奥深くに仕舞い込まれた古書は、時が過ぎればその存在も忘れ去られてしまう。今こそ、研究者として洋古書を扱える専門図書館員の育成が焦眉の急であろう。それは慶應のあらゆる宣伝媒体に掲げられる「国際化」への、図書館における重要な第 1 歩なのだから。「日暮れて道遠し」となる前に。